

各指定校事業の成果

平成 26・27 年度 学習と評価実践研究事業 指定校 雲南市立田井小学校

1 事業の趣旨

- (1) 教育課程編成の工夫改善
- (2) 指導方法等の工夫改善
- (3) 学習評価方法の工夫改善



2 事業の成果

(1) 「単元のゴールの明確化」

1時間1時間の授業がこま切れにならないよう、単元全体を通じて見直しをもって学習するために、単元最後のゴールの姿を明確にしています。

○国語「サラダでげんき」

単元を通した学習の流れを「学習の手引き」で示しながら、単元のゴールである「たいっ子スペシャルサラダを考えて、りっちゃんに手紙を書く」に向かって読み進める学習過程を設定しています。学習の手引きにより、その日の学習がどんな学習なのか、自分たちが今どこを学習しているのか確認しながら、最終的なゴールへ向け見直しをもって活動を進める展開となっています。

○外国語活動「What's this? クイズ大会をしよう」

児童は既習の語彙も加え、“What's this?” “It's ~.”の表現を使い、クイズをつくります。毎時間の導入時に授業者は、単元のゴールであるクイズ大会でのクイズの出題方法をいろいろなパターンによりデモンストレーションで児童に例示し、ゴールの姿をゆっくり理解させていきます。語彙の選択の幅をもたせたり、クイズの出し方を創造的に工夫させたりすることで、児童は意欲を高めることができます。また、単元の最後に近隣の学校の児童と合同でクイズ大会を行う、相手意識をもたせる場が設定されています。



(2) 「見直しをもたせる指導過程のパターン化」

1時間の学習の見直しをもたせ、自信をもって学習に取り組ませるために、指導過程を次のようにパターン化しています。授業者も児童も常に安心して学習を進めることができます。

○国語

「前時のふりかえり」→「めあての確認」→「音読」
→「読み取り（個→全体）」→「振り返り」

○外国語活動・外国語

「ウォームアップ」→「デモンストレーション」
→「アクティビティ」→「振り返り」

平成 27 年度複式教育推進指定校事業 指定校 奥出雲町立鳥上小学校

1 事業の趣旨

複式教育の充実を図るために、効果的な学年別指導の在り方を研究する。

2 実践内容

(1) 同時間接指導による授業づくり

- ・コンパクトな「追究課題」の同時導入
- ・学習の流れが明確な板書
- ・単元の内容に適したガイド指導
- ・グループ学習における思考の可視化
- ・まとめや振り返りの時間の確保

(2) 高学年複式学級における国語科学年別指導

[指導者:星野寿幸教諭]

①平成 27 年 9 月 18 日(金)

第 5 学年 単元名 プレゼンテーション講座

教材名 和の文化を受け継ぐ

第 6 学年 単元名 プレゼンテーション講座

教材名 町の幸福論

②平成 28 年 1 月 22 日(金)

第 5 学年 単元名 シリーズ 日本語探究その4

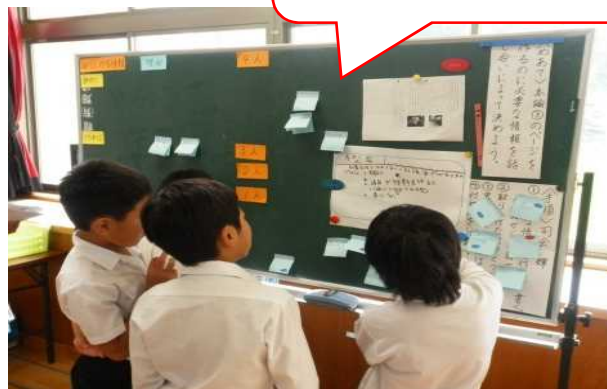
教材名 熟語の構成を知ろう

第 6 学年 単元名 シリーズ 日本語探究その4

教材名 言葉の由来に関心をもとう

【グループ学習の様子】

板書役に付箋を使って一人一人の考えを比較しながら板書をしています。



(3) 先進校視察

・日時 平成 27 年 12 月 4 日(金)

・視察校 山口県宇部市立小野小学校

今年度は、全教職員で小野小学校を視察し、国語科学年別指導を中心に複式教育の取組について学ばれています。

鳥上小の複式教育のイメージを共有化することにもつながる良い機会となっています。

(3) 「複式学級におけるペア活動の充実」

複式学級において、上・下学年児童をペアにし、国語では、読み取ったことを動作や対話で表現させたり、外国語活動では、上学年がクイズの出し方のお手本となったりしながら、上学年が下学年をリードする場をつくっています。上学年が下学年の学習のモデルとなっています。

所報 第57号

管内の教育

主な内容

- 1 所長所感 「考えようとしな、決められない、対話しない子供達」
- 2 学校訪問指導 事後アンケートから
- 3 各指定校事業の成果



出雲教育事務所
平成28年3月

「考えようとしな、決められない、対話しない子供達」 所長 松本 泰治

今の日本には、進んで自らの考えを持ち、自己決定したり、豊かに表現したりする子供が少なくなってきたのでしょうか？

日本サッカー協会の次期会長の田嶋幸三さんの『「言語技術」が日本のサッカーを変える』の本の冒頭に「ベンチを見ないイタリアチーム」「フリーズする日本の選手たち」という内容があります。ここでは、不利な状況を自分達で分析して、プレーを判断するジュニアのイタリア選手と、何かを問われたときにフリーズしてしまい、安易に監督に答えを求めようとするジュニアの日本選手の違いについて書かれています。どうやら日本のジュニア選手は自ら分析・判断し、プレーすることを経験していないということのようです。

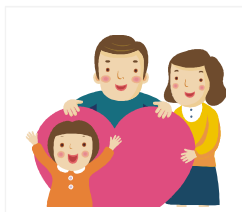
また、若者や子供達の会話の中でよく聞く「別に」「ビミョー」「なんとなく」という言葉。普段の会話の中で感想を求めたときによく発する言葉です。

子:「さっきのテレビおもしろかった。」

母:「どこが？」 子:「なんとなく。」

子:「このゲームはつまらない。」

母:「どこが？」 子:「ビミョー。」



このような会話になってしまうと、会話は全く広がらないし、他者との関係性も築けません。論理的な思考ができなくなってしまう。

この二つの例を見ると、日本の子供達は、自らが思考・判断することを放棄して簡単に結論を出し、自らの考えを述べないことに慣れてしまっているように思えます。これでは、思考は停止し、知識も広がってはいきません。そして、表現をすることもなく、他者と意見交流することもないので、他者の意見の存在にも気づかず、多様な考えを認める寛容さも失っていきます。

これらの原因の一つが学校にある(学校だけに責任があるわけではないのですが)とした場合、「一つの正解を求めることに重きを置いた指導が多くなっていないか?」「一問一答方式の指導になっていないか?」「多様な意見や考えを引き

出せるような学習課題の設定ができているか?」「子供達が協働で問題解決する学習活動が展開されているか?」などの疑問が生じてきます。

次期学習指導要領の改訂は「何を、どのように学び、何ができるようになるのか」が問われています。従来のコンテンツベース(内容理解中心)からコンピテンシーベース(資質・能力育成中心)の考え方になります。もちろん知識・技能の習得は基盤でありますが、それを活用し、探究する力や学びに向かう力、人間性など情意、態度等を含めた総合的な力の育成が一層重視されます。その目玉となるのが「アクティブ・ラーニング(課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び)」です。

学習指導要領が変わるたびに、新しい用語が出てきます。そして、その言葉が一人歩きをして、学校現場が混乱する姿を何度も見てきました。この「アクティブ・ラーニング」についても、十分に各学校で吟味をしていかなければなりません。

しかし、私は、この「アクティブ・ラーニング」の考え方の授業を過去に何度も見てきました。また、今話題となっている「反転学習による問題解決学習」や「考え、議論する道徳」の授業も数多く見てきました。しかも30年以上前の授業です。これらの学習方法は決して新しいものではなく、志ある教師たちが試行錯誤しながら取り組んできたものです。そして、これらに共通することは、上述した疑問のような授業ではないということです。そこには、児童生徒の主体的で協働的で、探究心に満ちた深い学びがあったように思います。

子供達にじっくりと思考する経験を積みませましよう。自分の力で判断させましよう。対話に基づく豊かな表現をさせましよう。廻り道をしてもいいのです。

哲学者の上田薫先生もおっしゃっています。

「真に効果ある動き(学習)は早くてはできぬ。(学習課題は)簡単に分からね方が発展する。このことはカリキュラムを考える上で重要だ。」

『林間抄残光』より

()内は加筆

学校訪問指導 事後アンケートから

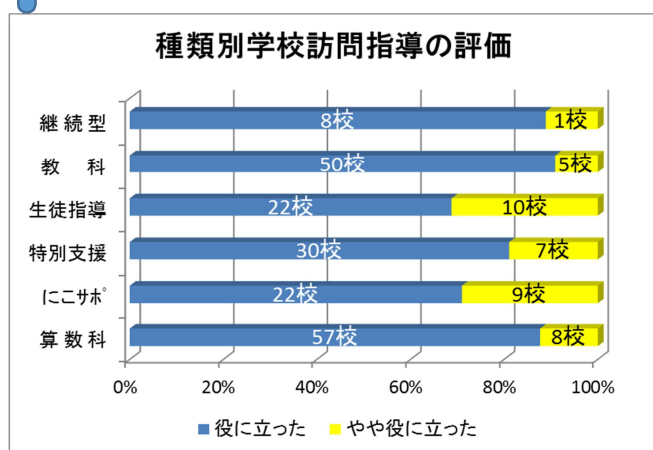
今年度は新たに「継続型学校訪問指導」が学校訪問指導のラインナップに加わり、2学期には「算数の授業改善に係る学校訪問指導」を全ての小学校で実施しました。どの学校も校内研究の推進や授業改善に対する意識が高く、熱心に授業に向かう先生方の姿を見ることができました。

お忙しい中、事後アンケートに回答いただきありがとうございます。訪問指導種類別の評価と自由記述欄の意見を紹介いたします。



1 種類別学校訪問指導の評価

～肯定的な評価をいただきました～



上のグラフから分かるように、「役立った」あるいは「やや役立った」と肯定的な回答をいただきました。今後も学校から必要とされる学校訪問指導となるように努力していきます。

2 継続型学校訪問指導

～さらに効果的な関わりを目指します～

【自由記述から】

- ◇ 学校の要請に応じた内容で、計画的かつ継続的に一貫した指導を受けることができ、校内研究の充実を図ることができた。
- ◇ 複数回の訪問により次回の訪問に向けた取組を意識できた。
- ◇ 研究の基本から実践までを見通して指導してもらえて良かった。
- ◇ 手続きが容易なことも学校側としては助かった。

学力育成・授業改善・校内研究等を推進する学校の主体的・自主的な取組を支援する目的で始めた継続型訪問指導です。学校の要望に応じて担当者が関わってきましたが、訪問の日時の設定等、十分に期待に応えられない部分もありました。来年度はより効果的な関わりができるよう見直します。

3 教科等に係る学校訪問指導

～児童生徒が主体となって学ぶ授業が必要です～

【自由記述から】

- ◇ 授業の内容・展開だけでなく学習に向かわせるための配慮や授業に向かう教師の姿勢についての指導もいただけたことは有意義だった。
- ◇ 国語科の学校訪問指導を受けたが、本校の課題に対してポイントをついた指導をしていただき有効であった。継続的に指導をしていただきたいという職員の声もあった。
- ◇ 県教研に向けて授業を構想するところからご助言いただき、当日の授業だけでなく普段の授業の改善にも大いに参考になった。
- ◇ 算数の授業を通して、学力を育てるための取組課題が明らかになった。授業設計について、改善点を示していただき、取組に生かすことができた。

昨年度以上に「見通しと振り返り」を意識した授業がなされていました。授業のねらいに迫るための言語活動を効果的に取り入れる授業も多く見られました。一方で、児童生徒の思考と離れた教師主体の展開になる授業もありました。

これからは、さらに「児童生徒が主体となって学びを進めるにはどうすればよいか」、「身につけた知識・技能をどのように活用するか」という視点をもって単元を構成していく必要があります。

4 生徒指導に係る学校訪問指導

～授業を通じた集団づくりが基本です～

【自由記述から】

- ◇ 不登校等、支援を必要とする児童生徒について具体的な状況を理解して頂き、指導方針について確認することができた。

6 算数の授業改善に係る 学校訪問指導

～算数科から他教科へ広げることが大切です～

【自由記述から】

- ◇ 学力調査結果から見える弱みからどう授業改善に生かしていけばよいのかというポイント、児童が自ら学びを取りに行く導入の仕方、授業のしかけなどのヒントが具体的に分かり効果的だった。
- ◇ 職員全員で共通理解することができ、全員の意識を高めることができた。
- ◇ 教員の意識改革には悉皆(全ての学校に指導主事が出向いて)の研修は有効。このような研修の仕方を年度当初に計画的にしておく、時間もしっかりとれて良いのではないかと。(算数に限らず、いろいろなテーマで)

全国学力・学習状況調査の調査結果分析をうけ、県全体で算数の授業改善を進めることになりました。今回お伝えした授業改善のポイントは、算数科にとどまらず他の教科でも意識して実践することが求められます。

- ◇ 「振り返り」にじっくりと取り組ませることや自力解決の時間を短くするなど理解できたが、実態に応じた指導は理想どおりにはならない。

上記の意見のように、求められているような授業を行う困難さを感じている学校もあるようです。学校によってさまざまな課題があり、授業改善の取組がなかなか進まない場合もあるようです。

下記の意見にもあるように、その壁を越えるためにはどうすればよいか、管理職のリーダーシップの下で、ぜひ考えていただきたいと思います。

- ◇ 聴いて終わりにならないように、いかに実践につなげていくかを具体化しなくてはいけないと考える。

教育事務所は学校のニーズに応えられるよう到来年度の学校訪問指導の要項を作成中です。
ぜひ来年度もご活用ください。



- ◇ 昨年度からの経過や現在の状況、学校がめざす方向について協議をすることで共通理解し、生徒指導体制の充実につなげることができた。
- ◇ QU について、考察の仕方や学級での具体的な取組の方法など、校内での有効な活用についてアドバイスをいただいた。
- ◇ いじめ防止基本方針の見直しができて良かった。

すべての中学校と子どもと親の相談員が配置されている小学校へ訪問しました。ほとんどの学校において、いじめや不登校の未然防止の取組に力が注がれていました。

生徒指導において様々な取組がなされていますが、授業を通した集団づくりが基本です。教師の授業力の向上を軸にし、生徒指導体制のさらなる充実をお願いします。

5 特別支援教育に係る 学校訪問指導

～全教職員による理解が必要です～

【自由記述から】

- ◇ 児童の実態把握から授業構成を考えることの重要性や、生活単元をどうとらえるか等について指導していただき、授業づくり・児童理解に役立った。また、職員研修としてもよい機会となった。
- ◇ 授業者はもとより、まだ担当をしたことがない教職員にとって具体的な指導を受けることができたのは有効であった。また、通常学級在籍の支援を要する児童への配慮についてのヒントも得ることができた。
- ◇ 生徒の実態に合わせた単元構成のあり方、組み合わせ方や特別支援学級在籍の子どもの進路保障、進路選択等、幅広く協議、指導していただけて良かった。

特別支援学級を初めて担任する教員、新たに特別支援学級が設置される学級担任の教員を対象に訪問を行いました。

新任の教員は、学習指導や児童生徒への指導に不安や悩みを抱えていることが多く、校内で担任を支援する体制を整えておく必要があります。

そのためにも全教職員が特別支援教育に関する理解を図っておかねばなりません。研究授業や協議には全教員の参加をお願いします。

